

向殿充浩 第7詩集 『架空世界の底で』

第七詩集

『架空世界の底で』

向 殿 充 浩

(2026年1月改訂)

目次

- アラビアへの船出
- アラビアの街で
- 砂漠の街で
- ニューヨーク
- 青ざめた鳥たち
- 反抗
- 十二月の太陽(マヤの遺跡にて)
- 廃墟の神殿で音を奏でる
- シュルツェを訪ねる(ヴォルスに捧げる)
- 閉路(ヴォルスに捧げる)
- カシスで、石や魚たち・I(ヴォルスに捧げる)
- カシスで、石や魚たち・II(ヴォルスに捧げる)
- 夢のように石畳の紋様をたどり(ギリシャにて)
- 無題(哀れにも死んでいった芸術家たち)
- ぼくの願いは人間でなくなること
- 呪術師たちの末裔
- ぼくは狂気の中に生まれた
- 虚無の断崖で
- 喪の領域に・II
- インドへの憧れ
- ヴァーラーナシー
- ガンガーのほとりで
- 沈黙の寺院(インド、ファテプール・シクリにて)

ヒンドゥーの夜
老いたシッダルタ
ぼくの領土
モヘンジョダロ・I
モヘンジョダロ・II
インドの大地で
舞い降りる(ボロブドゥールにて)
ヒンドゥーの神々に
ネパールのブッダ
神々の山
カイラーサの宮殿にシヴァを訪ねる
神々の大地に
チベットの風に
曼陀羅の世界へ
砂曼陀羅を描く
花粉の舞う空の下で
突破しきれないなにか
HIROSHIMA
残光
トキの向こうへ
ぼろを纏って旅に出よう
蒼茫の道
竹林にたたずみ
雨粒の音に耳を傾け
賢者とともに過ごした秋の一日

向殿充浩 第7詩集『架空世界の底で』

時間の中の天使が

Four Walls

空の青

風を切って鳴り響く音たちの向こうで(タージマハル旅行団に捧ぐ)

アラビアへの船出

ぼくは船に乗る。

どこにも寄る辺のないぼくは船に乗る。

家も学校もぼくの居場所じゃなかった。

伝統なるものに塗り固められたあの街も

厳肅な儀式を重んずるあの宗教も

ぼくは嫌いだ。

平凡なものに塗り固められた日々の生活を

ただ黙々と生きているだけの人たち。

そこにはどんな輝きも燐めきも感じられないし、

その笑顔は美しくない。

だからぼくはどこでも孤独で、

分かり合える友なんていない。

だからもう故郷になんて、何の未練も何の心残りもない。

だから、ぼくは船に乗る。

つまらない女たちとも別れ、

かしこまった人たちからも逃れるのだ。

向かう先はアラビア。

そう、アラビアだ。

未知の世界は夢を搔き立てる。

香料や宝石の取り引きは儲かるらしいし、

商人たちとのつきあいもおもしろそうだ。

ぼくはアラビアの服をまとい、サンダルを履き、

短剣を差して街を歩く。
アラビアの強い酒も飲みたいし、
エキゾチックな踊りも眺めてみたい。
金を稼いで、アラビアの女たちを抱いてみるのもいい。
今のぼくの心には羽が生えている。
どんなものだっておもしろいはずだ。

ただ、聖職者の輩と官吏だけは
御免蒙りたいものだ。
ぼくはそんな輩が大嫌いだ。
ぼくは流れ者、どこにも寄る辺のない者、
誰でもない者だからだ。
その地がぼくの心を満たすかどうかは分からぬ。
いや、きっと満たさないだろう。
別の醜い世界に足を踏み入れるだけかもしれない。
でも、ぼくは船に乗る。
ぼくはその世界を生きてみたいだけ。
その思いがぼくの心を突き動かすのだ。
ぼくをあざ笑う奴は山ほどいるだろう。
でも、それでいい。
ぼくは船出する。
ぼくはアラビアに逃げ出すのだ。
ただ、それだけ。
今のぼくにはそれしか道がない。

アラビアの街で

ぼくは故郷を捨て、船に乗った。
かつての街での堅苦しい空気、
杓子定規な人生観、
享楽と打算だけの大学の仲間たち、
何もかもがぼくの心に合わなかつた。
ぼくは自由な空気を吸いたかった。
だからぼくはひとりで船に乗り、
アラビアにやって來た。

アラビアの街は何もかも新鮮だった。
景色も違えば、行き交う者たちの衣服も顔も表情も違う。
慣行も風習もだ。
市場の活気も広場の大道芸も
樂師たちの奏でるエキゾチックな響きも
ぼくの心に適つた。
酒場に行けば若い娘たちが薄衣の衣装で酒を運んでくれ、
舞台での女たちの踊りも煽情的だ。
ここにはぼくの心を満たす自由な空氣がある。
仕事には簡単にありつけるし、金も簡単に稼げる。
難しい顔をして理屈を並べる必要もなければ、
ややこしい帳簿とにらめっこする必要もない。
気ままに金を稼ぎ、好きなように振る舞う。
知らない国でまるで夢の中を歩いているかのようだつた。

だが、そんな夢のような気分も少し褪せてきたある日、
夜の酒場で立派な身なりの紳士が話しかけてきた。
「その発音や表現はどこで身につけたんだ？」
ぼくは素っ気なく答えた。
「国の大大学で身についたんだろう。
みんなそんな風に喋っていたから。」
すると男はぼくのことをあれこれ聞きただし、
「今いくら貰ってるんだ？ 週にこのくらいだろう。」
と言って金額を言った。
ぼくが軽くうなづくと男は言った。
「週1回、その金額でどうかね。」
ぼくはまだそ分けなかった。
「やばい仕事は願い下げなんですね。金を稼ぎたいわけじゃない。」
男は大笑いした。
「やばい仕事じゃない。お堅い仕事だ。ただ教養が要る。
でもあんただって金は多いに越したことはないだろう。」
「それはまあそうだ。」
男はぼくの肩を叩いた。
「なら話は簡単。
私が執事を務める外交官の家で令嬢の家庭教師をやって欲しい。
上品な言葉を教えて欲しい。」
ぼくは怪訝げな顔で訊いた。
「なんでまたぼくなんかに。」
男は肩をすくめて言った。

「この地でそんな言葉が使える母国人はなかなかいない。

あんたは流浪者を装っているが教養はあるようだ。

だからだよ。

ただ髪は綺麗に整え、髭も剃ってもらわねばならない。

私が床屋に連れて行く。」

「服装は？」と訊くと

「それはこちらで用意する。

あんたに任せてはどんな格好になるか分からんからな。」

これで話がついた。

準備が整ってその家に行くと、

外交官は居丈高でいけすかなかつたし、母親は高慢で厳格。

とても好きにはなれなかつた。

だが、娘は純情可憐なうぶな少女だった。

教えてみると素直で頭も良かったし、

給料も良いから悪くない仕事だった。

ただ毎回の授業の後での母親とのお茶の時間は

苦痛以外の何ものでもなかつた。

自分を何様と思っているかは知らないが、

授業にはあれこれ注文をつけるし、

自慢話や世間話にゴシップのてんこ盛りで

まったくやれやれだった。

そんなことで多少嫌気が差し、

娘ともそれなりに親しくなったので、

大学で身についた上品な母国語とやらで話されている
隠語や卑猥な言葉を娘に教え込んだ。
だけどそれがバレたもんだから、母親はカンカンで即刻クビだ。
でも、ぼくは不届きなことをしたわけじゃない。
ただ、上品な方々という輩がしゃべっている
生の言葉を教えただけだ。
いかがわしいことをしたわけでもないし、
誘惑したわけでもない。
だけど、そんなことが奴らに通用しないことは
ぼくにも分かっている。

だから、ぼくはまた船に乗って街を出た。
ぼくにとってはそれで良かった。
清々したし、こんなところに根を下ろしたくもない。
ぼくの道がこれから先どうなるかは分からないが、
そんなことはどうでも良い。
また知らない街に行って違う生き方をするだけ。
それがぼくのしように合っている。
どこかでのたれ死ぬかもしれないが、
それもどうでもいいことだ。

海のうねりと潮風の香りだけが、ぼくの心に叶っている。
ぼくはただのどうでもいい流浪者、
誰とも共感しない孤独な異邦人。

港が近づいた。
稼いだ金があるからこの街で商売でもするか。
それから酒と女だ。
紳士淑女ぶった輩とはおさらばだから、
何一つ気兼ねすることもない。
明日からぼくの生き方に戻るだけ。
それだけだ。
とはいえる、ぼくはもう夢の中を生きてはいない。
ぼくは現実を生きている。
砂を食むような現実をだ。

砂漠の街で

誰もぼくのことを知らない街、
ぼくのことなど誰も気に留めもしない街、
日のさんさんと降り注ぐ砂っぽい街。
その街をぼくはひとりで歩く。
ぼくが知ってる者なんて誰もいない。

黒い猫が道を横切りつつ、ぼくをじっと見つめる。
けれど、やつは、そのまま足早に走り去った。
向こうから艶やかなベールを被った女たちが歩いてくる。
笑いながら。
若いきれいな女も交じっている。
ぼくにちらりと投げる冷たい視線。
微笑みもせず、すぐに目をそらして歩きすぎた。

居酒屋があつたので、入ってみる。
こぎたない店だ。
暇そうなすれた女が出てきたので、酒を頼む。
つつけんどんな女は無視して黙って酒を飲む。
酒は心を癒やす。
心を癒やすのはいつも孤独と酒。
それだけだ。

腹が減つたので、料理も頼む。

うまくはない。
萎びた野菜はくたくただし、
肉は硬くて臭みもある。
それに、この香辛料の使い方ときたら。
まあいい、
心を癒やすのは孤独と酒だけなんだ。

金を払って店を出る。
日差しがきつい。
通り過ぎる男たちの不機嫌そうな目。
侮蔑を含んだ目でぼくを見る奴もいる。
広場へ行ってもいいが、今日はやめておこう。
大道芸や物売りで騒がしいだけだ。

汗をぬぐう。
楽しいものなんて何もない。
でも、孤独が心を癒やしてくれる。
それがぼくの生き方。
これまでそうだったし、
これからもまたずっとそうだ。

ぼくははしぐれの存在。
世に訴えるものもなければ、
世界から認められたいものも何もない。
ただの名もなき詩人。

いや、ほんとうは詩人なんかじゃない。
ただの流浪者、ただのどうでもいい者だ。
でも、だから、誰もぼくのことを知らない街は心安らぐ。

燕がぼくの前をかすめて飛び過ぎた。
明日は、海の近くの街にでも行くとしよう。
だが、その前に今夜は場末の劇場で、
女たちの踊りでも見てゆくか。
たいしたべっぴんはないだろうが、
女たちがあそこを曝け出すのを見るのも悪くない。
気が向けば、その後、女を抱けばいい。

どのみち、明日になれば、この街ともおさらばだ。

ニューヨーク

ぼくはニューヨークにやって來た。
アラビアはおもしろかったが、
戦争が始まったから、どうしようもない。
敵国の軍が攻めて來るというので、
大嫌いな役所に出向き、ややこしい移住手続きをして、
ニューヨーク行きの船に乗った。
いったい何のいわれがあつて、国の権力者同士の争いに
ぼくが関わらねばならないといふのか。
国家のために尽くすだの、民族のために戦うだの、
ぼくはまっぴらだ。
だから、ぼくはニューヨークへの船に乗つたのだ。

ニューヨーク、それは世界一の街。
ぼくの生れた街と違つて、自由と活氣がある。
道にはたくさんの自動車が猛スピードで走つてゐるし、
空に向かつて高く伸びるビルは壯觀そのものだ。
場末のアパートでの騒々しい隣人たちに囲まれた生活は
多少うるさく、うつとうしくもあるが、我慢するしかない。
ぼくはどこでも異邦人だから、
白い目で見られるのはいたしかたない。

だけど、この街はおもしろい。
ラジオをつければ、当代隨一という指揮者の

感動的な交響曲の演奏も聴けるし、
街を歩けば、下劣な音楽をがなり立てる
キャバレー や ショーホールも並んでいる。
その界隈には下品なバー や ナイトクラブもあるし、
ストリップ劇場 や SM の館まである。
気晴らしにはもってこいの街というわけだ。
そして、誰もが金、金、金。
すべてが金で語られ、すべてが金で価値が決まる。
だから金は必要だが、食ってゆくための仕事には困らない。
ぼくは金のためなら、やばい仕事以外なんでもやった。

ぼくは何人かの前衛詩人と知り合い、
彼らのグループに入った。
その詩は新鮮で衝撃的。
ぼくの心をおおいに揺さぶった。
ただ、やつらの酒とヤクとフリーセックスにまみれた生活にはついていけない。
とはいえ、そんなつきあいの中でぼくはこぎれいな女を手に入れ、
一緒に住むことになった。
この街では、女の尻はほんとうに軽い。
女の柔肌を毎夜抱き、
気の済むままに女の中に精を吐き出せるのはいうことない。
だけど、それは最初のうちだけ。
だんだん、その女にも飽きてきたし、
そのうち喧嘩の毎日になり、とうとう女は怒って出て行った。

でも、ぼくはそれで清々した。

所詮、ぼくは孤独な誰でもない者じゃないか。

そんなある日、酒場でアラビアでのことをしゃべっていたら、

それを耳にした出版社のやつが本を出さないかともちかけってきた。

ぼくだって金が欲しいから、出すことにした。

たいして売れはしなかったが、酒代の足しにはなった。

だが、その本のおかげで、大学から問い合わせが来た。

アラビア語を教えるなら大学で教えないかという話だ。

荒んだ生活にも少し嫌気が差してきたし、

少しあましな仕事でもしようかという気になって、

ぼくは大学の講師になった。

髪を切り、髭を整え、ジャケットに蝶ネクタイという出で立ちで教壇に立った。

アラビア語を教えるながら、アラビアでの経験や習慣を交えて話をする
と、

学生にはけっこう受けが良かった。

ある教授が、アラビアに関する論文を書いて博士号を取らないかと言
うので、ぼくは論文を書いた。

アラビアの風土、風習、商習慣、倫理観、宗教、男女関係、家族関係
など、

ぼくの経験に基づいて書けば、すぐ論文になった。

その過程で、ぼくは神話や歴史も学び、

アラビアだけでなく、インドやアジアのことも学んだ。
それらの知識も用いて博士論文を仕上げた。
このぼくが博士様というわけだ。
おかげでこの国の市民権も得ることができた。

だが、安定した生活ができ、
回りからそれなりに敬意を払われても、
ぼくの心は満たされない。
ニューヨークの摩天楼の底から、
ぽつかり浮かんでいる美しい月を見上げると
なぜか涙が出る。
ぼくは自分をごまかして生きているという思い、
これはぼくの生き方じゃないという叫びが
心の奥底から沸き上がってくるのだ。
だから、戦争が終わったら、
ぼくは何かを求めて旅に出る。
何を求めているのか分からぬが、
それでもぼくは何かを求めているのだ。

青ざめた鳥たち

傷ついた天使たちは巨大な翼の下で羽を休め、
人々と神々が闊歩する茫漠たる大地を見下ろしていた。
機械の音と調和する足取りを麻薬のように求める虚ろな存在者たち
が、
冥府に吹く風を浴びる哀れな生き物たちが、
一切の栄光を焼き尽くす荒野で
屈辱への道を歩いていた。
夜の街灯の下では
震える息を弾ませながら半裸の少女が踊り狂い、
奇怪な絵が描かれた分厚い壁の前では、
男たちが酒びんを振り回して天を呪っていた。
地下鉄ではすさんだ空気が
地上を目差して膨れ上がり、
図書館ではいにしえの時代への抑え切れない郷愁が
巨大な醜悪さをさらけ出していた。

爆撃された都市よ、
その残骸の下に埋め尽くされた
無数の呻きを形にしてみるがいい。
衣服をはぎ取られて殺された少女たちの悲鳴を
神への呪いの中に練り込んでみるがいい。
そうだ、
滅びた文明は今はただ粘土板の中に

その不思議な魔力を眠らせているだけなのだ。

イシュタル門を誇った栄光のバビロンよ、
マルドウクの威容を誇ったエサギラ神殿よ、
そして、王の中の王、
ナボポラッサルよ！
けれど、アダルの月に捧げられた
燔祭の煙はどの虚空に飛散してしまったのか。
コンピュータの、電子回路の、
神経質な時間パルスの下で、
邪悪な者たちの声は、
今なお巨大文明のすみからすみまで響き渡っている。
きらびやかな文明の至るところにある断点に、
かつての邪悪な者たちが今なお巣くっている。
そして神は人々を裸にして
死神エレシュギガルの前に引き出しし、
一夜にして世界を粘土に変える洪水は
やむことなく繰り返される。
けれど、アラートは次々に用意されずにはいない。

青ざめた鳥たちよ、
虐げられたこの石たちを
ぼくはいったいどの土地に置いたら良いのか。

反抗

とめどもない神との戦い。
人間を捉え、
大地に繋ぎ止めておこうとする神との戦い。
ぼくは絶壁のふもとで、
電子の高周波のうねりの中で、
光の干渉しあう空間の泡立ちの中で、
神と戦う。

けれど、ぼくは声を聞く。
声を聞くのだ。
鈍い光を帯びた無気味な無意識の奥底にうずくまっている
殺伐とした冥土の原野を吹く風のような、
茫洋たる年月の上の調和のない波のうねりのような、
激しい、荒々しい、
いつ果てるともない声を
ぼくは聞くのだ。

たくさんの碎けた石があった。
惨たらしい戦争と
無数の殺戮と略奪があった。
悲鳴と喘ぎ声と呪いの歌が
遊星の上に渦を巻いていた。
どんな時間の破片にも

血の臭いがしみついている。

むせかえるような歴史の豊饒さよ、
限りない喪の領域よ、
物質の中から膨れあがつてくるおぞましい恐怖よ、
無垢の笑いの根絶やしにされたはげ山の刑場よ、
これがあなたの望みだったのか！
これがあなたの創造した世界の結果だったのか！

でもきっとあなたは満足だろう。
あなたは孤独な行者のような心で
時代を達観した賢者のようなほほ笑みで
このフラスコの中の世界を
天使たちが嘆く声、石たちが喘ぐ声を
冷徹な科学者のようなまなざしで
見つめているのだろう。

でも、ぼくは聞きたい。
このような軋んだ音しか生み出さない瓦礫の山が
あなたの望みなのか？
ぼくは戦わずにはいられない。
訴えずにはいられない。

朝の霧の中で
星屑が輝く夜空の上で

干からびた荒野の境界で
ぼくはあなたと戦うだろう。
幾度ともなく切り立った波をぶつけ合い、
意志を擦り減らし、
互いの文字を戦わせるだろう。

夜の森の閉ざされた神話よ、
微生物たちの非人格的な陰謀よ、
打ち壊された文明よ、
傷つけられた精神よ、
蔑まれた人間たちの愛よ、
この遊星の上の一切の混乱、
口ごもった祈り、
血塗られた宗教、
歪められた悟り、
それらすべてがあなたの意志によっているのだ。

だからぼくは祈りの破片をさらに小さく砕き、
狂気と失意の荒野で
荒れ騒ぐ月に向かって呼び掛ける。
地底の魔王よ、
十億年の彼方の鬼神たちよ、
トキの断片を食い尽くす羅刹たちよ、
さあ、今こそやって来るがいい、
おまえたちの時代なのだ。

錯乱と幻惑の中で
根拠のないらんちき騒ぎをやっている
投げ捨てられた生き物たちの声を聞くがいい。
ぼくの領土の野ざらしにされた祭壇を見るがいい。
独裁者の闊歩する巨大な機構と
数字の支配する冷酷な電子回路を
おまえたちの炎で焼き尽くすがいい。

けれどあなたの扉は開かれない。
あなたは拒絶したままなのだ。
ああ、いらだちを含んだ瞬間的な創造力よ、
原初の光によって泡立たされた色彩のポリフォニーよ、
でも、あなただけではない。
あなたが拒絶しているだけではないのだ！

ぼくの道はいつも
何ものかによって閉ざされている。
遊星の上の虫たちのように
ぼくは這いつくばり、
狭い空間を跳びはねて生きている。
焼けつく砂と、
ひび割れた記憶回路と、
意識にとっては無に等しい沈黙。
光と電子のうねりが
ぼくの夢をがんじがらめにしている。

ぼくの年月は電磁波の絶えず変調する
空無の領域を歩くことに捧げられた。
ぼくの呪術はホトケを呼び出すことに費やされた。
意味不明の氾濫する文字たち、
化石の中に隠されてしまった普遍性のヴィジョン。

ぼくはキャンバスを引き裂きたい野望をもっている。
過激な衝動がぼくの斜面を駆け下り、
稻妻のような閃光がぼくの住処をうち震えさせている。
ぼくの反抗の突き当たる空よ！
巨大な宇宙の墳墓よ！
破滅へと導く神よ！

きっとぼくは誰でもない者たちが
空虚の中から取り出してきた魔法陣を
砂の上に刻印するだろう。
きっとぼくは鬼神たちによって傷つけられた雪の領域に
ぼく自身の小さなつぶやきを投げ入れるだろう。
あなたは新しい場を用意するかもしれない。
けれどぼくだって
これまで無であった世界からの
新しい宇宙の風を
心の内に吹き抜けさせているのだ、
光が食い荒らされるこの宇宙の冬に。

十二月の太陽

滅び去ったマヤの遺跡、
緑の野に生ぬるい風が吹き渡り、
十二月の太陽がジャングルの上に輝いていた。
空には黒い鳥が飛び交い、
涯しない沈黙が広野の上に横たわっていた。

かつてこの地を支配した奇怪な顔をした神々、
十二億六千万カトゥンの時を
星々の運行と共に維持し続けて来た巨大な暦、
祭壇の上ではチャックモールが
もはや生贊の捧げられない巨大な時間を見やっていた。

遺跡に照りつける十二月の太陽、
延々と続く緑のジャングル、
そのただ中の真っ白な時間の中に取り残された
神々の祭壇、天文台、そして、
風の中に搔き消えた祈りの声。

けれど、神殿の頂では、
ぼくたちの時間がゆっくりと碎けた。
一切が四十三億二千万年の時の渦に飲み込まれ、
遊星の上でのたあいない戯れが
宇宙の根源たるビッグバンからの波動の上で

さざ波のように揺れている。

神々の虚ろな手が
振り上げられたまま止まっている。
西のジャングルに
大きな夕日が沈もうとしていた。

(マヤの遺跡にて)

廃墟の神殿で音を奏でる

森の中にそびえる廃墟の神殿に登り、
未知なるものへの音を奏でるふたりの賢者。
真っ赤な太陽の残光が
海のように広がる緑の森の上に降り注ぎ、
壮大な静けさがうずくまっている世界。
その世界は謎に満ちているかもしれなかつたが、
世界の外で流れる真なる音を釣り上げること、
それが彼らの目指すものであつたろう。
世界はなぜ存在するのか、
なぜこのようなかたちで存在するのか、
この宇宙が存在する以前の時はどうなつていたのか。
その問い合わせていかなる存在者も答え得ない世界で、
ただ淡々と音の列が続いた。

日が沈み、あたりをひんやりとした静寂が支配し、
うす暗くなりかけた空に宵の明星が輝いた。
誰も見ていなかつたが、
その響きは全宇宙にこだまし、
さざ波のようにあらゆる存在者たちの心に降り注いだ。
夜になり、星が輝き、月が煌々と森を照らし出すと、
その明るさの中で、
清新の響きが広大な森と大空にこだまし、
滔々と流れる音楽は

宇宙に眠っているあらゆる音を掘り起し、
この世界のあらゆる相を巡るかのように変幻し、
延々と鳴り響き続けた。

途方もない可能性が弾けた瞬間かもしれなかつた。

世界が新しい相に進む予兆かもしれなかつた。

現実の中での欲望に依拠する淀んだ世界に、
再び、絶対者の咆哮が吹き荒れ、
求道者たちの朗唱が

風の中を舞おうとしているのかもしれなかつた。

その聖なる響きは、
大地に巢食う亡者たちには弔鐘となるかもしれなかつた。

この世界の内の存在者たちは、
みな、世界という舞台の内で、
何かを演じているに過ぎない。
そして、それは、すべて戯れに過ぎないのだ。

ふたりの賢者の音は
そんなあやふやな世界を超えて響き続けた。
天の窓から滴り落ちる真音をすくい取る試みから生まれたかのような
音の列が果てることなく続いた。

夜明けとともに
神殿の頂上でふたりの賢者が紡ぎ出した響きは止み、
叫びにも似たトランペットの響きが導いた高尚な音の列は

朝もやの中にかき消えた。
朝の光が静かに森に降り注ぐと、
ふたり賢者はただ黙って神殿を降りた。
朝の澄んだ空気が大地を包んでいた。

シュルツェを訪ねる

潮の香りを含んだ風に
陽光が降り注ぐ港町、
小さな路地をいくつも曲がって
ぼくは海辺のその店に辿り着いた。
バンジョーを弾く酔っ払いが
悲しげな眼で自作の詩を口にしていた。

ぼくは上等の赤ワインを注文してグラスに二つ注がせ、
一つを彼の前に差し出した。
彼は不機嫌そうな顔でじろりとぼくを見つめ、
「ありがとよ。」と短く言ってワインを口にし、
「良いワインだな。」
とそっけなく言った。

時間の上に滴り落ちる夢のかけらが
はかなく消えていった。

「なんか用かい。」
彼がぶっきらぼうに聞いた。
「絵を一枚。」とだけ言うと、
彼は画用紙に錯綜する線を描き、
「酔いどれ船、おれの本心さ。」
と言って悲しげな笑いを見せた。

世界は土塊の集まりに過ぎないのかもしれなかつた。

彼は立ち上がり、言い残した。

「ワインはうまかつた。

だけどあんたとつきあいわけじゃないんでね。」

ぼくはひとり残され、絵を眺めながら、港を見つめた。

陽光をいっぱいに浴びた帆船がゆっくりと港に入ってきた。

世界の美しさが心に沁みた。

でも、それは幻影で、

きっとその絵の方が真実なのだ。

ぼくは心の中でただ頭を垂れるほかなかつた。

(ヴォルスに捧げる)

閉路

道が閉ざされているのを知らないわけではない。

ぼくたちの存在というものが

唯一者の戯れにも等しいものだということから

目をそらしているのでもない。

でもぼくは耳を澄ましたいのだ。

重い大気の中にポツンと置き去りにされた声、

世界の絶壁の上で荒れ騒ぐ風の声に

耳を澄ましたいのだ。

誰もがいつも夢を見ているわけではない。

無人の遊星の上の光のかけらが

時間を飛び越えて骨たちを照らしているのでもない。

けれど閃光によって廃墟となった都市の全景が

月明かりの下の残虐な祭壇が

希薄な大気に向かって呻いているのだ。

大地は怒りと哀しみとに満ち、

海は乾燥した宇宙に向かって波を泡立たせている。

小さな一枚のキャンバスに張り付いた

星や記号たちの他には

笑いをたたえているものとてない。

ゼロと一、
それから無限、
漂泊者の魂の焼けつく荒れ野で
神がひとりぼっちで
石を削っている。

(ヴォルスに捧げる)

カシスで、石や魚たち・I

青い色の空間で
さまざまな植物が記号となる。
ぼくたちを包み込む透明な球体、
沈黙の目、
無言でじっとしている石たちの
存在の向こうでのつぶやきが
ぼくたちに時間の断点を教えてくれる。

記号と化した石や魚たち、
重みを持たない図形と四方に残る深い爪痕、
無邪気に、自由に、
ただ存在すること以上の行為を拒絶する
柔順な存在者たち。

言葉の閉ざされた空間の隙間で
さまざまな物体が形になろうとうごめいでいる。
遊星の表面の小さな岸辺には
カシスの夢が落下している。
存在があらゆる石から
ひとりでに浮かび上がってこようとする瞬間に。

(ヴォルスに捧げる)

カシスで、石や魚たち・II

風が消え、
魔法の文字に彩られた道が消え、
昨日の雨の中での夢が
静かな池の波紋に消えた。

白いキャンバスの上の
その小さな領土の上の
奔放な跳躍の中に
無数の瞑想が消えた。

神の領域に踏み込み、
果てしない韻律を繰り返す呪術師たち。
荒々しい神々の足音を耳にし、
絶望の淵で燐光を放つ透明な魚たち。
そして、宇宙と時間の魔法を
もう一度この小さな土の上に再現するぼくの試み。

けれど、宇宙の円環に沿って張り巡らされた吉兆を
もう一度キャンバスの上に描くのは誰なのか？
未知なるものへの密やかな夢を
もう一度無意識の原野へと解き放つのは誰なのか？

石を刻み込む試み、

向殿充浩 第7詩集『架空世界の底で』

石を積み重ねる試み、
たつた一つの夢を石の上で碎く試み。

(ヴォルスに捧げる)

夢のように石畳の紋様をたどり

夢のように石畳の紋様をたどり、
風のように島から島へと巡り渡る。
さざ波のように音が家々の白い壁をかすめ、
海がゆっくりと潮の香りを運んでゆく。

ぼくは雨に濡れた騎士たちの館を通り過ぎ、
咲き乱れる花たちの中に
何千年もの沈黙を続ける石たちの笑いを眺める。
羊たちの群れからは
牧歌的な鈴の音が響いてくる。

誰でもない者たちの上に
アルカイックの笑いが
重なり合う一瞬。

(ギリシャにて)

無題

哀れにも死んでいった芸術家たち。
彼らが自由になれたのはキャンバスの上でだけ、
閉ざされた空間の内でだけ。

現実の中に根ざす夢の美しさは
雨に濡れたレンガのようにそつけない。

崩れてゆくもの、
戯れの中に埋没するもの、
マイナスの世界、
一、
哀れな天使たちのような。

ぼくの願いは人間でなくなること

ぼくは一匹のしらみでありたい。

丸い月の下の孤独な遊星を這い回る

一匹のしらみでありたい。

そうすれば

何も考えることはない。

混乱もないし、悟りもない。

祈る必要もなければ、石碑を刻む必要もない。

びゅうびゅうと吹く乾燥した風が

ぼくを砂の向こうへ吹き飛ばすだろう。

時間がぼくを朽ち果てさせ、

ぼくの根拠を海へと押し流すだろう。

一匹のきりんを

ぼくは探し続けている。

呪術師たちの末裔

ぼっかりと浮かぶ丸い月の下で、
ビルディングが光り輝く都市の幻影。
けれど、そのきらめく明かりの下で、
世界は今なおきしみ続けているし、
ひび割れた夢は大地に堆積し続けている。

そんな世界の底で、
ぼくはただの囚われ人でしかなく、
惨めな気持ちで生きている。
この遊星は青春のしなやかさを失い、
喧嘩と憎悪とひずんだ感情が
電子空間の中で渦を巻いている。

でも、かつて呪術師たちは
夢の閉じ込められた世界の殻を打ち碎き、
世界の裏側にあるかもしれない
妖艶であり、狂気でもあるような錯乱の中から
真理へ通じる響きを紡ぎ出してきたのだ。

その呪術師たちの末裔たるぼくは、
だから、この世界の底に立って
光り輝くビルディングを見上げ、
新たな軋みと怒りが押し寄せ、

あらゆるものが碎けるこの遊星の浜辺で、
もう一度石を積み重ね、
もう一度石を打ち鳴らす。

踏みしだかれたぼくの夢と
創造の意味の反照しないのっばらぼうの大地。
顔をこわばらせて空を見上げる石たちの声を
でもぼくは道端に置き去りにしている。

ぼくは狂気の中に生まれた

ぼくは狂気の中に生まれた。

ぼくは狂気の中に目覚めた。

だからぼくは

孤独に、焼けつく音の砂漠をさまよう。

歪んだ量子空間で、

錯綜した意識の森で、

ぼくは裸で神を呪い、

野蛮なリズムで踊り狂い、

ぼくにまとわりつく干からびた沈黙に

ぼくの記憶で抗うのだ。

絶えまない潮騒は

無の中の音符たちを搔き乱し、

漆黒の海は

ぼくの呼吸をいらだたせる。

夜の街の喧噪の中で

独りぼっちで俯いたぼく、

昼の楽しげな公園で

喘いで青空を仰いだぼく、

誰もいない雪の山で

電子のうねりを搔き回したぼく、

狭い閉じた部屋の中で

壁に向かって色彩を投げつけたぼく、
ああ、けれど、ぼくとは誰なんだ！

ぼくの意識の向こうに
ぼくでない無意識がある。
ぼくの存在の裏側に
呻いているぼくの記憶がへばり付いている。
叫び出すがいい！
そして投げつけるがいい！
ぼくでない無の領域を目がけて。
天界から降り注ぐ光のシャワーを目がけて。

でも、その叫びは
きっと誰でもないものたちの中に霧散するだろう。
誰でもないものたち、
それはボサツか、
それとも神か、
それとも邪悪な鬼神なのか。

かつて遊星の上の虫たちと
血みどろの戦いを演じた鬼神たちの踊りが
今は一枚の絵の中に焼きついている。

けれどトキは安いではない。
トキは燃え盛っているのだ。

ぼくの想念は荒れた黄土の上で
隕石の爆撃の下で
途方もなく無となりうる音たちのはざまで
虚無に向かって吠えているのだ。

夢を見た天使は首を切られ、
美しかった鳥は
赤い炎で黒焦げになるだろう。
電磁波の荒れた波動に
ぼくの無意識の波がぶつかっている。
意味を擦り減らす戦いを
ぼくは挑んでいる。
何に対して、
けれど、ああ、何に対してなのか！

あなたは打ち壊した。
あなたは打ち壊さずにはいないだろう。
あなたは打ち壊し続けるだろう。
ぼくは脅え、泣き、
悲しみと恐怖とで
裸の体を干し草の中に隠すだろう。
石たちだってそうだ。
風が荒れる夜空を見上げ、
顔を歪めておののいている。
動物たちだってこそこそ逃げていった。

ただひとり立っている枯れ木よ、
おまえだけは毅然として立っている。
でもおまえに対してだって、
あの者は容赦しない。
あの者は
仏頭を壊し、
寺院を破壊し、
聖典を灰にし、
空を赤く染め、
音を瓦礫の中に投げ込むだろう。
飢えといくさを
大地の上に蔓延させ、
恐ろしい疫災が世界の上に
脅威となつて覆うのを
喜悦に満ちて見つめるのだ、
あの者は。

いや、それはあなたなのだ。
ぼくはあなたの望みを知っている。
あなたの望みはかなえられるだろう。
でもぼくは反抗せずにはいられない。
たとえばぼくの音たちが
ひとつ残らず打ち碎かれ、
ぼくの色たちがくすんだ灰色の石たちによって
打ち壊されたとしてもだ。

たとえ海の音が闇の中で聞き取れなくなっても
空虚が極限まで世界を支配しても、
ああ、たとえそうなっても、
ぼくは反抗をやめない。
ぼくはぼくを坩堝の中に放り込み、
その坩堝から立ちのぼる煙によって
あなたと戦うのだ。
ぼくは遊星の上のしらみ、
ぼくはただの石、
ぼくはちっぽけな何ものでもないものだ。
でもぼくの扉は叩かれている。

あなたはぼくを踏みしだいてゆくだろう。
でも扉を叩く者たちは
きっと誰かを叩き続ける。

虚無の断崖で

風の中の反乱。
風の中の
荒れ騒ぐ風の中の
砂たちの反乱。
兵士たちの
流浪の民族たちの
人間によって破壊された仏たちの
碎け落ちた記憶の切片への
途方もない反乱。

けれど、太古の石は
不思議な笑いを浮かべ、
広大な地平は
宇宙のちっぽけな法則をあざ笑っている。
薄っぺらな紙片の上では
賢者たちの言葉が
言われなき誹謗によって汚され、
断崖のふもとでは
無数のトルソが
存在者たちの喘ぎの中に立ち続けている。
金色の鳥は孤独に闇の中を徘徊し、
裸の天使は流砂の中でうち震えるだろう。
閉ざされた魔法陣がぼくの中心で渦を巻き、

空の青の中では
誰でもない者たちによって
絶えまなく弔鐘が打ち鳴らされる。

ぼくの内側で展開を待っている無限図形への憧れ、
とうの昔に鳴り止んでしまった絶対者の咆哮、
虚無の祭壇の上では風化したブッダが
のっぺらぼうの時間に貼り付いている。
世界の浜辺では清澄の人の足跡を
天使たちがひっきりなしに踏みしだいている。

千年が、そしてまた千年が、
淡々と羅刹たちに食い荒らされてゆくだけの遊星。
けれど、
声は荒れ騒いでいるのだ！
存在でも非存在でもない
巨大な時間の渦流が
ガンガーの中で渦を巻いているのだ！

遊星の上から、時間の斜面から、
石たちが転がり落ちている。
どこにもない賢者たちの光輪の中で、
何ものでもないものたちの踊りが
丸い大地の上で、
陶酔しきって踊り続けられている。

世界と世界でないものとを隔てる絶壁の山のふもとでは
未知なるものへの儀式を執り行う一人の祭司が
縹渺たる風の中に宇宙的形象を祭っている。
そして存在の表面に付着した者たち、
時間の斜面で喘いでいる者たちが、
泥を練って石たちの声を紡ぎ出しているのだ。

だから、ぼくは求道者たちのいなくなつた
ちっぽけな遊星の表面で、
空っぽの宇宙の中で、
碎けた声たちを飲み込んでゆく無明の大海上で、
幻界の中の試みを刻印し続けるだろう。
そして、平らな時間の上に清澄の響きを打ち込み続けるだろう。
天使たちの無垢の笑いのために、
吹き払われた無名の声たちのために。

でもきっと、道の上では「ぼく」が石と化している。
あなたがそれを望んでいるのだ。

喪の領域に・II

人々の行き交う褐色の道の上を
赤い花、黄色い花のうち捨てられた寺院の上を
ゆっくりと天使たちが歩き過ぎた。

星たちは巨大な呻きとともに
数十億年の彼方の音の記憶を照らし出し、
反逆する虫たちは
宇宙の中心で騒いでいた。

小さな遊星の上の
無意識だけが光であるような世界。
緩やかに存在を泡立たせる
荒涼たる風の吹き荒れる小さな世界。

その世界の中で、ぼくはひとつの脅威にさらされていた。
ぼくの祈りは
血の匂いのしみついたねばねばした泥土の上で
宇宙的混沌の中に還元され、
赤ら顔の預言者たちが
残虐な光景の中で
毒々しく息づいていた。
そうだ！
ニューヨークの、ロンドンの、東京の、

ネオンに輝く巨大な喧噪の下で
ぼくの呻きは
冷たい夜空に突き当たる。
そして、天使たちがいつの日か
沈黙の雪に輝く
エンパイア・ステート・ビルに降り立って、
積み上げられたコンクリートの朗々たる笑いに
心静かに耳を傾けることがあるかもしれない。
けれど、ダルマは
時間の中に根拠をもたないダルマは
怪鳥ガルダの飛び回る
巨大な灰色の海の中に
あてどもなく飛散してしまっている。

だから、ぼくは太古の音の響きわたる銀河的な宇宙を
ひとつ、またひとつ、ゆっくり碎いた。
すると巨大なエナジーが
現実を繰り返すにとどまらない
魔術的な三界の中心を貫き、
沈黙の向こうの永劫の光が
超越的なチェス盤の上を疾駆した。

そうだ、
インドラの矢は世界そのものを破壊せずにはいられないだろう。
この世界の狂気は

シヴァによって打ち碎かれずにはいないだろう。
ぼくは祈りを捨て、
神々の粘土板を捨て、
数十億光年の巨大な宇宙の中の
ほんのちっぽけな遊星の上の
小さな波のざわめきのそばで
ゆっくりと砂の上に記号を描いた。
ぼくの声を小さな紙の上に結晶させ、
ぼくの夢を薄っぺらな大地の上に埋め込むために。

そしてぼくは異界と交信を通して、
世界の存在するわけを問い合わせた。
すると突然、
非存在がふてぶてしく横たわる世界の無気味さが
巨大な魔術を終わりにさせた。
ぼくはゆっくりほほ笑んで
共演者のシッダルタと共に
ガラス玉演戯の幕を引き、
ぼくの存在からゆっくり降り立った。
世界が粘土に変わっていた。

インドへの憧れ

インドへの憧れ、
その思いはニューヨークにやって来て以来、
ずっとぼくの心でうごめいていた。
ぼくが知り合った前衛詩人のやつらが
インドについて熱っぽく語っていたし、
ぼくが真の天才だと思っている前衛音楽家は
インドの韻律を用いてプリペイドピアノの新曲を発表した。
博士号を取るために学んだ比較神話学やインド神話も
インドへの憧れを搔き立てた。
ボストンの美術館に行けば、
世界の破壊を踊るシヴァ神や妖艶なるターラー神、
悟りに達したブッダの像がぼくの心をインドに誘った。

この世界は、絶対に、
一なる神の思し召しなんかで創造されてはいない。
ヴィシュヌが、シヴァが、ブラフマーが織りなす世界、
混濁とした多様なものが大地に渦巻き、
四十三億二千万年周期という途方もないカルパが巡る世界、
そんな世界こそが、真の世界を映し出している。
人間なんてその世界の中では何ら神の恩寵など受けておらず、
ただ大地に投げ出されているだけ。
ぼくは大学の図書館にあるインドに関する本を読み、
インドの神々やインドの神話について学んだ。

偉大なる叙事詩マハーバーラタが
どれほどぼくの心を惹きつけたことか。
仏教の経典も紐解き、ブッダなる人物の教え、
ナーガールジュナの教えも学んだ。

でも、そこは同時に、厳しいカーストによる差別があり、
途方もない貧富の差のある世界。
王侯はニューヨークの大富豪を凌ほどの豪奢な生活を送り、
貧しい者たちは信じられないくらい惨めな生活に
甘んじている世界。
そして、溢れんばかりの人々がひしめき合う世界。
ぼくはそんなもののすべて混在するインドを
自分の足で歩き、自分の目で見てみたい。

だからぼくはインドへ行く。
ヒンドゥーの言葉、インドの習慣も勉強した。
最初は、インドへの放浪の旅に出ることを考え、
大学に辞職の申し出をしたが、
だったら、インドのヴァーラーナーシー大学が
講師を求めているから、行ってはどうかと勧められた。
紹介状を書いても良いと言われたので、お願いした。
ヴァーラーナーシーはヒンドゥーの聖地だし、
まずはそこに住んでインドを体験するのも悪くない。

学長名の紹介状を送ってもらったら、

あつさり招待の返事が来て、
そこには驚くほどの俸給の額が書いてあった。
ざつとこっちの二倍ほどだ。
教授として迎えるとあり、
アジアの神話や文化の講義に加え、
英語の講義もして欲しいとのことだった。
聞いたところに拠ると、学長からの紹介状には、
アラビアを渡り歩いた博士で、
インドやアラビアの宗教や神話にも詳しいと
最大限の褒め言葉が並んでいたようだった。
ヴァーラーナシーでは、
家とメイドと車も用意すると書いてあった。
紹介状に書いてある偉い博士様を迎えるなら
そんなものなのだろう。

ぼくは白いスーツに身を包み、白いハットを被って、
インド行きの船に乗った。
初めての上級客室だ。
アラビアに行くときも、ニューヨークに行くときも
三等客室だったから、雲泥の差だ。
上級客室の客は男も女も上品ぶつて偉そうで、
いけ好かないやつも多かったが、
ニューヨークの大学で
回りの者たちとうまく折り合う術も身につけたおかげで、
この船旅では適当に調子を合わせてやり過ごすことができた。

ときには、パーティに出て、若い令嬢とダンスをしたり、
紳士相手にダーツやビリヤードをしたこと也有った。

船がムンバイに着くと、
そこはまさに人が群がる港だった。
ポーターに荷物を運ばせ、入管手続きを済ませ、
ぼくは列車に乗った。
列車はインドの大地を走った。
荒涼たる荒野もあれば、のんびり草を食む牛たちや
色鮮やかなサリーを纏って農作業する女たちも見えた。

ぼくはインドにやって来た。
西洋とは別の精神が息づくインドなのだ。
何かがぼくを待っている。
きっと何かが見つかる。
そんな胸の高まりを乗せて
列車はインドの大地を走っていた。

ヴァーラーナシー

ヴァーラーナシーの駅で列車を降りると、
大学の事務長が迎えに来ていた。
事務長の車で大学に行くと、そこは恐ろしく広く、
外のごみごみした不潔な世界と異なって、
美しい緑に囲まれており、
すばらしいヒンドゥー寺院まであった。
学長に挨拶に行くと、学長は頭を低くして言った。
「ここには我が国有数の優れた学者を揃えているつもりですが、
インドの文化や宗教、芸術を語るにしても、
インド人の視点、インド人の感覚で捉えがちだ。
だから、あなたには、外の視点に立って
インドについて教えてもらいたい。」
私は笑顔で答えた。
「ありがとうございます。ぜひ、そうさせてもらいます。
ですが、同時に、私はインド人の視点も
学ばせていただくつもりです。」
学長のもとを辞すると、事務長が、
大学のことや生活のことを事細かに説明してくれ、
私の執事を務めるという男も紹介してくれた。
「この男は信用できる男です。
先生にはみっともない生活をされては困りますので、
この男を頼っていただければ。」
家には召使いが二人もいるということで、

大学には運転手が運転する車で通うように言われた。
まったくしたいしたご身分になったものだ。

大学が用意してくれた家は、立派な門のついたたいそうな家で、
生まれてこの方、こんな家に住んだことはない。
門を入れば、庭には美しい花も咲いている。
食事は立派なダイニングで、銀製のナイフ、フォークだ。
ベッドには天蓋までついている。
「ご友人や淑女をお招きしても大丈夫でございます。
庭でパーティをすることもできますので。」
そう言う執事は、何ごとにもそつがなく、安心できた。

だが、ぼくはこんなことをしたくてインドに来たのではない。
こっちの生活に慣れてくると、休日には街に出かけた。
ただ、最初、執事は、
ぼくが庶民と同じ服装で出かけることを是としなかった。
「身の安全のためにございますよ。
外国の立派な紳士という身なりが大事というもので。」
最初は執事の言うとおりにしたが、
場所によってはあまりに浮いてしまうので、
そのうち、同年代のインド人の教員と同じようなかつこうで
出かけるようになった。

ぼくは、ガンジス川のガートで人々が沐浴するのも見だし、
ガンジスの岸辺の火葬場にも行った。

インドはどこもかしこも喧嘩そのもの。
街角のシヴァを祀った寺院では、
首を切られた犬の血が寺院に塗りつけられ、
寺院の中には女陰ヨーニと交合した男根リンガが祀られている。
街はおそらく不衛生で、
道には、牛や驢馬が行き交い、犬や猿が屯している。
そして、乞食や物乞いがなんと多いことか。
まさに見たことのない世界であり、
世界の混沌が凝集されていると言っていい。

だが、そんな混沌の裏側から、真理の香りが立ち昇っている。
それがインドなのだ。
街で流れる下劣でやかましい音楽とは別に、
高尚なラーガもある。
教典や仏典を紐解けば、そこからは真理の響きが漂ってくる。
だが、人々がそれを聞いているわけではない。
人々はただ何かにすがっているだけ。
そして、目の前のことどもに執着して生きているだけだ。

家に帰って、執事にそんなことを少し話すと、
彼は笑って言った。
「旦那様には関係のないことでございますよ。
旦那様の生きておられる世界はここですので。」
そう言って、彼はいつものように
美しい皿に載った前菜とスープを並べ、

向殿充浩 第7詩集『架空世界の底で』

「気晴らしにはビールが一番でございますよ。」
と言って、上等のビールをグラスに注いでくれた。

ガンガーのほとりで

ガンガーのほとりで
ぼくは足を洗った。
時間の破片が敷きつめられた宮殿の上を
サリーを纏った女性たちが歩きすぎた。
美しい、けれど、冷たい表情で。

なまぬるい日の光の下で
白い牛たちが寝そべっていた。
汚いなりで
無邪気な子供たちが走り回っていた。

誰も気づいていない。
でも世界はひび割れている。

沈黙の寺院

沈黙の寺院、
廃墟の中の石の寺院、
掃き清められた石畳の上で
夕日が存在するものたちの影を美しく形づくる。
ぎやあぎやあ鳴く鳥の叫びが
空間にけたたましい。

青い空、青い光、
沈黙の時間。
数百年、数千年が言葉を失い、
今や天使の住処となった
赤い石の廃墟の寺院。

薄汚れた天使たちが
白い翼をもった天使たちが
けれど、石の音だけが響く世界の中で
始源の光を見つめている。

(インド、ファテプール・シクリにて)

ヒンドゥーの夜

別の大陸で
別の神々が栄えている。
けれどのっぺらぼうの表面。

歴史は重いけれど、
生き物たちの営みはそつけない。

干からびた夜の空気に
木々の緑だけがみずみずしい一瞬。

老いたシッダルタ

美しい石を手に入れたいわけではない。
巡り合わせの悪い星座の下で
ただ法則に従って道を歩いているだけなのだ。
創造された形象は碎けずにはいないし、
キャンバスは色塗られずにはいないだろう。

野ざらしにされたあばら家と
うずくまる天使と
雨に打たれた小鳥たち。

ぼくの中の意味を失った追憶が
シッダルタの夢に溶け込み続いている。

ぼくの領土

荒れ果てた褐色の荒野に
ふてぶてしい大木。
山はみなはげ山で、
大きな岩が日の光に焦げついている。
それがぼくの領土、
ぼくの呼吸する大地なのだ。

かつては僧院があつた。
賑わいもあつた。
読経の声が敬虔で、
一者への帰依があつた。
でも今は、
砂埃の舞う平板な土壤に
汚いなりの子供が
ぽつんと牛を追いかけている。

犬たちは嘲りの笑いを浮かべ、
叡知の破片は硬い土に突きさつたままだ。
神聖な像は風化してしまい、
空の色は生ぬるくなつた。
そう、これがぼくの領土なのだ。

ぼくはこの領土で、この荒野のただ中で、

瓦礫を集めて祭壇を築く。
かつて生きていた文字たちや
星や生き物たちを供え、
炎を灯して
知らない神に祈りを捧げる。

.....

けれど狼たちの遠吠えと
鳥たちのけたたましい鳴き声が呼応するだけ。
ひび割れた遊星の一角で
この小さな領土で
ぼくはむなしく踊りを踊る。

だから、さあ神よ、新しい戦いを始めよう。
ぼくはこの領土に満足していない！
ぼくは錯乱と幻惑の渦巻く葬送の道に
カンダルヴァの光を刻印したいのだ。
ぼくは悪意に満ちたカーリーの踊りに
遠い宇宙の弔鐘を打ち鳴らしたいのだ。
だから、さあ、神よ、
呻いているぼくの祭壇に
あなたのハンマーを打ち降ろすがいい。

モヘンジョ=ダロ・I

あまりにも明朗な光の中に廃墟はあった。
とてつもない静寂がそこを支配していた。
いったいどの時間が
この素焼きレンガたちの声を聞きとどけるのか、
そういう疑問が心を過ぎた。

緊張の解けた時間の中で
かつての街の賑わいが嘘のように
朗々たる日の光が
静かに数千年を照らし続け、
あまりにもあっけらかんとして、
あまりにも沈黙して、
壊れた褐色の土器の上で
青い空がひゅうひゅうと舞っていた。

ぼくはいったい時間のどの断片を
切り取ろうとしていたのだろう。
太陽と月と記号たち、
砂と素焼きレンガたち、
ぼくが見た都市の幻影、
時間の破片があまりにもゆっくりと
風の中に吹き払われていた。

モヘンジョ=ダロ・II

膨大なレンガの道、
ほこりっぽい砂の道、
野ざらしにされた土器の破片。
かつて夕食の鍋が煮られた土間にぼくは立ち、
人々が行きかった道の上をぼくは歩いた。
かつて水が入れられた壺の破片を拾いあげ、
侵略者によって破壊された土壠に手を触れた。

いったいどの時間が
この廃墟の意味を具現するのに必要なのだろう？
そういう疑問が心を過ぎた。
だからぼくは描かれた文字を解読し、
刻まれた図形を判別しようと試みた。
けれど野の向こうの広大な大地が、
そしてそのまた向こうの大きな夕日が教えてくれた、
この時間が外へは流れ出していないのだということを。

ちっぽけな遊星の上の
ほんの一瞬の栄華を誇った都市の残骸、
冷たい宇宙の法則はそっぽを向いたままなのだ。
だからぼくは石を一つ積み上げた。
砂の上にぼくの足跡が残った。

インドの大地で

一つの声をぼくは聞いた。無数の声をぼくは聞いた。
この縹渺たる風の中で、この閉ざされた電子のうねりの中で、
この言葉の無い三界の中で。

限りない冥土の原野には無数の虫たちが群がっていた。
大地はゆっくりと宇宙開闢の歌を歌った。
インドラは神酒ソーマを痛飲し、名馬ハリの引く戦車に乗り、
マルト神群を従えて、ダーサの城塞を粉碎した。
アグニは闇を除き、悪魔を滅ぼし、稻妻として中空に閃いた。
天空を彩る色彩豊かな星々が
ゴーゴーと夜空に音を立て始めた時代、
石たちが遊星の表面から転がり始めた時代であった。
シヴァは神秘的な静寂の中に瞑想し、
カイラーサ山の頂で世界の創造と破壊を踊った。
虎の皮を腰にまとい、羅刹を退治し、
神々に挑戦する阿修羅の三つの城塞を破壊した。
ヴィシュヌは温和と慈愛の神、善を嘉する神であった。
妃ラクシュミーと共に永遠の光に満ちたヴァイケンタに住み、
靈鳥ガルダに乗り、
四本の手に武器を携えて、地・空・天を三歩で闊歩した。

けれど太初にはなにもなかつたはずなのだ。
波のない無限空間の中で、

光が一定の法則に従って輪舞していたはずなのだ。
ただ唯一者が闇に包まれて存在し、
ひとり呼吸していたはずなのだ。
唯一者たる者の愚かなる意欲よ、
タパスによって生まれ出た者の永劫の苦しみよ。
茎から絞り取った神酒ソーマを祭火に投じ、
世界の内側に渦巻くカオスに捧げるがいい。
そして気高い宇宙の沈黙に向かって弔鐘を打ち鳴らすがいい。
そうだ、神々との戦いは遙か彼方の時代から始まっているのだ。
ぼくは扉をたたく者たちの声を聞く。
ぼくはガンガーの流れの中に渦巻く声を聞く。
存在の裏側の斜面で
薄っぺらなトキの断片を碎いている者たちよ！
風の中の反乱を引き起こす無数の記号たちよ！
世界の浜辺で戯れている無垢の天使たちよ！
遊星の表面の骨壺からは
多様性をもった現象世界が立ちのぼり、
車輪によって粉碎された時間は
宇宙の底に向かって落話し続けるだろう。
引き裂かれた図形たちの呻き声はどこに結晶したのか？
傷付けられた世界の壁の前で記号たちは
どんな響きを発しているのか？
鏽びついた鉄の塊は朝日の中で煌々と輝き、
色褪せたビルディングは純白の雪の中に埋もれるだろう。
けれど凍り付いた時間の向こうに、

青々と燃える金属色の炎の向こうに、
ぼくの投げ捨てられた記憶があるのだ。
現在という虚ろなトキを越えて、
さざ波のように響く音の障壁を越えて、
占星術師の文字盤の向こうに、
荒野の巨石の向こうに、ぼくの涯てしない反抗があるのだ。
遊星の上では鬼神たちと虫たちとの血みどろの戦いが
飽くことなく繰り返されてきた。
カンダルヴァの歓喜は闇の中へ葬られた。
シヴァの踊りは遊星の上の光を破壊した。
ラクシュミーの歌は色褪せざるをえなかつた。
けれど世界を創造したのは誰であったか。
それは神であったか、それとも創世主であったか、
世界を創造したのは「私」ではなかつたのか！
ヤージニヤヴァルキヤよ、
汝はいったいどの断点から世界を切り裂き、
どんな聖句によって時間を静止させたのか。
アートマンはどの業を通ってブラフマンに達したのか。
宇宙はなんという深い靈性の風土の中に浸っていたことだろう。
聖典の叡知はなんという閃光を
祭儀の上にきらめかせたことだろう。

けれどこの遊星は熟して熱に浮かされ、
人々は軋みあって生きてきたのだ。
モヘンジョダロが廃墟と化した日、

どれほど悲鳴が赤い空を焦がしたことだろう。
バカヴァットの聖句によってパンダヴァの勇者は
クルクシェートラを血の海に変え、
かつてクヴェーラ神と戦って、
天空を自在にかける戦車を奪い取ったラーヴアナは
鬼神ラーマによって葬り去られた。

多数の都市国家が起り、自由思想が勃興し、
森林が切り倒され、畠が灌漑された。

東方の産物、西方の貨幣が流入した。

海を渡る恐れを知らぬ船乗りたち、
灼熱の砂漠を何日も旅する商人たち、
旱魃に収穫の望みを断たれて農民たち。

婆羅門は祭祀の中心として不動の地位を築き上げ、
降雨・豊作を祈願し、病魔を払い、
呪術によって万物を支配した。

そして弱肉強食の戦争が果てしなく続き、
強力な専制君主国は武力で小国を併呑した。

かつて草原を疾駆した彼らの戦車が
どれほど虐殺とどれほど略奪を欲しいままにしたか、
それを一遍の詩の中で歌い上げることは
並大抵のことではない。

聖仙リシが靈感によって与えた光明は
茫漠たる大地で干からびずにはいなかつたのだ。
でも遊星の上のちっぽけなさざめきに
十億年の彼方の宇宙に潜むあなたのまなざしは届きはしない。

平原な時間の上に滴り落ちる響きはあまりにも不可解だった。

シッダルタよ、

けれど世界の壁は突破されねばならなかつたのだ。

混沌の連鎖を止める光が指し示されねばならなかつたのだ。

世界でないものの剥き出しの響きが

びゅうびゅうと吹き込んでこなくてはならなかつたのだ。

光明は爛熟した呻き声をぐつぐつ煮込んだ坩堝の中で

カピラヴァストゥに現れた。

それは人類の青春時代でもあつた。

東では孔子が、老子が、西ではソクラテスが、プラトンが、

そして遊星の上の様々な表面で

無数のソフィスト、諸氏、沙門が、

ロゴスを、タオを、仁を、ニルヴァーナを、

ダルマを、ブラフマンを求めた。

人類が踏破への道を探った黎明の時代でもあつた。

シャカ族の賢者は愛馬カンタカに乗って別れも告げずに家を出、森で

苦行し、菩提樹の下でついに禪定に入った。

奇跡を透視した聖仙アシタよ、捨て去られた麗しきヤショダラよ、乳粥

を差し出した愛しきスジャータよ、

教えに耳を傾けたヴァーラーナーシーの行者よ、

汝らは祝福されるがいい。

一方、マーラは楽器が天上で鳴り響き、

神々の称賛の声が聞かれるとき、

軍勢を整えてホトケを目掛けて進軍した。
毒蛇を吐き、火を吹く山を転がし、
闇の軍勢の闇の声が三界に響き渡った。
けれど、ボサツの眉間から一条の光明が発し、
マーラは敗北する夢を見たのだ。
哀れなるマーラよ、
けれど汝が負けたのはただホトケに対してだけであった。
ホトケは法の車輪を回転させ、無量の光を解き放った。
多くの沙門が教えに帰依し、僧伽に帰依した。
ブッダガヤが、シュラーヴァスティーが、
ヴァイシャーリーが、クシナガラが光に包まれた。
無明が打ち碎かれ、縁起が明らかにされ、
輪廻が終滅させられた。
けれどゴータマに背を向けた沙門シッダルタよ、
汝の道もまた正しかった。
一者への道は教えによっては極められなかつた。
自己の内に、自己の奥底に潜む声によって
生み出されるものの内にのみ道はあつた。
そして世界は相も変わらず喧噪と欲望に満ち溢れ、
苦しみは炎となって大地を駆け巡つた。
聖と俗の戦いもまた繰り返された。

アレキサンダーはカイバル峠を越え、タキシラへ進んだ。
若き天才の偉業はけれどはかなかつた。
チャンドラグプタはギリシャ人を一掃し、

ヒンドゥークシュを越え、バルチスタンに達した。
アショーカはカリンガで十万人を殺害し、
巨大な統一を成し遂げた。
けれど彼は仏教に帰依し、
無数の石柱を打ち立て、法勅を刻ませた。
野の中に横たわる岩には今なお彼の理想が結晶している。
サンチーで、サルナートで、ストゥーパが築かれた。
ガンダーラで、マトゥラーで仏頭が刻まれ、寺院が作られた。
広大な大地のいたるところに僧たちの帰依、
一者への帰依があった。
アジャンタの石窟では仏頭が何千年も瞑想を続けた。
金色の鳥は永遠の中を飛び続けた。
タキシラではカニシカのもと仏教会議が開かれ、
ペシャワールは商都として栄えた。
ブッダの声は北へ、東へと広がっていった。
東方の賢者らは天竺に憧れ、天山を越え、
タクラマカンを越え、パミールを越えてやって来た。
法顯が、玄奘がやって來た。
ナーランダでは何万という僧が学んだ。
図書館には数千冊の写本が収まり、ホトケの教えのみならず、
芸術、哲学、言語、医学が教えられた。
どれほど澁刺とした学僧たちの議論が戦わされたことだろう。
どれほど熱烈な読経の声が響き渡ったことだろう。

けれど、その高揚した時代の声は廃墟の中に埋もれてしまった。

仏頭は石畳の上に転がり、
壁画の鳥は洞窟の中に置き去りにされた。
経典の教えは流砂の中に埋没し、
悟りの清妙さは空無の中に飛散してしまった。
アジャンタでは無駄となった努力が化石と化していた。
サンチーでは乾いたレンガの上を風がひゅうひゅう舞っていた。
サルナートでは塔の回りの菩提樹だけが朗らかだった。
今なお五体倒地で礼拝するチベットの僧たち、
敬虔な香の薰りが
遙かなる時代の余韻をさざめかせるだけだった。
ブトカラでは今なお荒野のただ中に
長大な時間がうずくまっている。
冷たい風の中の、薄曇りの空の下の、
忘れ去られたブッダはどこを見てほほ笑んでいるのか、
そして石たちはどんな沈黙で時間のうすを回していくのか。
野の向こうの雪山に輝く夕暮れの微光を受けて、
ぼくはトキの空虚を手で探るのだ。

そうだ！ブッダは五百年と言った。
けれどあれからもう五倍の年月が流れ過ぎたのだ。
ぼくたちの道は下り坂になり、
古い神々が、インドラが、シヴァが、
亡靈のように立ち現れては
遊星の上の巨大な機構を支配している。
カーリーは今なお髑髏の首飾りをして、いけにえを求めている。

そうだ。遊星の上にひしめきあう無数の喘ぎ声を聞くがいい。
今なお殺戮と虐殺と女たちの悲鳴と子供たちの泣き声を
いたるところで耳にすることができる。
人生の内に閉じ込められ、
世界のフラスコの中で犠牲となった尊い生き物たちよ。
彼らにできることは祭壇の回りを跳びはねることだけ、
干からびた文字を砂の上に並べることだけなのだ。
かつて僧院に響き渡った読経の声はどの空に霧散したのか。
かつて経典に刻まれた叡知はどの時間の中に燃え尽きたのか。
ぼくはインドの大地を踏み締め、
人々のひしめく喧噪の街を歩き、
死に絶えた神々に祈りを捧げ、
世界の壁に描かれた光の文字を読んだ。
ガンガーでの沐浴に一生の願いを託し、
リンガの回りに麗しい花束を投げ掛ける脅えた生き物たちよ。
行者たちの虚ろなまなざしをぼくは見過ぎし、
街の商人たちの間をすりぬけた。
混乱の国、そして色彩の豊かな国。
かつて異国の軍隊がこの大地を踏みにじり、
かつて一人の裸の聖者が非暴力で独立を勝ち取った。
世界に喚き散らした詩人はガンガーのほとりで死体を焼いた。

ちっぽけな、ちっぽけな、ちっぽけな石たちの声よ。
ダルマの消えた海で怪鳥ガルダが虚空の中を飛び回っている。
渦巻く時間がぼくの相念を泡立たせている。

歴史の苦味が大地に染み込んでいるのだ。
ああ、アシュバッタの木は永遠であった。
人々がよりどころとする
プラーナの胎動によって生まれ出た世界よ。
鏡の中に映る像のように
自己の中に見られる巨大な歴史の渦よ。
けれどトキは完結してはいないのだ！
そして遊星の上での生起は
ただ引き起こされたというだけなのだ！
エメラルド色の海の底に沈澱した石たちの声、
星座の隙間で光を放つ鬼神たちの踊り、
かつてプラスコを振って神が与えた法則を
今はさそりたちや蛇たちが食い荒らしている。
大地の叫びが荒れた野に亀裂を走らせ、
跳びはねている生き物たちは
水辺の泥の中から空を仰いでいるのだ。
朗々たる日の光の下のモヘンジョダロの廃墟で、
野のただ中のブトカラで、シルカップで、ビール・マウントで、
アジャンタで、タクティ・バイで、
ぼくは知らない神に祈りを捧げ、
古びた聖典の文字たちを拾いあげた。
けれど存在の深奥では今なお未知なるものが
無気味に光り続けている。
世界の壁は遊星の表面にへばり付いているだけのぼくたちには
あまりにも重々しい。

かつて無の領域に意識の波動を投げ入れた
何ものでもないものたちよ、
おまえたちの狂気が生み出した荒れ騒ぐ宇宙に、
ゴーゴーという存在の断片の流れの中に、
いけにえとなった者たちの墓標を打ち立てるがいい、
世界の終わりの日には、きっと。

舞い降りる

空から舞い降りるぼくたちの目に
森の中の方形の基壇が見えてくる。
中央には小さな円いストゥーパが
三層の輪をなして並んでいる。

仲間たちが頂上の露壇に次々に降り立ち、
基壇を右回りに回りながら、
再生の輪廻から解放された
瞑想するブッダたちに祈りを捧げる。

未来のブッダである彌勒菩薩を幻の中に見、
遠い時空の彼方からぼくたちは旅を続けた。
一つの道を
何千もの道を、
そして一つの宇宙を
何千もの宇宙を
歩き続け、夢に見続けた。

祭壇の上の空には満天の星、
森の向こうでは獣たちの声。
存在の中心の乳海では
神がまどろみの中に横たわっている。
清々とした無限の時間が

向殿充浩 第7詩集『架空世界の底で』

無人の遺跡の上で
微かな光を放っていた。

(ボロブドゥールにて)

ヒンドゥーの神々に

美しい足音を響かせて
神々が列をなして進む。
舞台の上では
今日もシヴァ神が創造と破壊とを踊っている。

けれどこの世界は、
四三億二千万年のマハーユガの終わりに一切が融没し、
絶対者へと帰滅する世界。
そして、その後に同じ長さのブラフマーの夜が続く世界。
そのブラフマーの百年の後に、ブラフマーの一生が終わり、
乳海にまどろむヴィッシュヌの夢見る蓮華の花に、
次のブラフマーが現れる世界。

その世界で、
神々ですら、ただその役割を演じ、
数々の定めと呪いにまとわりつかれている世界で、
宇宙の暗闇にぽっかり浮かぶ遊星の上では
ゲームに酔った生き物たちの騒ぎが
熱く熟した時間の上に渦を巻いている。

神々が美しい足音を響かせて
列をなして進む。

神々が列をなして、
莊厳な寺院の中に吸い込まれてゆく。
ダルマに従うことを嘉する神々だけのわざが
風化した石と古文書に刻み込まれている。

ヤージニヤヴァルキヤよ、
聖典の言葉をもって、
宇宙の暗闇にぽつかりと浮かぶ小さな星の上に、
神々の夢見るような無関心さを
もう一度投影してみるがいい。
時間のただ中の今日という一点を
白日の下に晒すために。
空虚を嘉する神々たちの声を
大気の中に融没させるために。

ネパールのブッダ

どこにもない道の上で、
賢者たちの光輪が
乾いた風の中を舞っていた。

どこにでもある空白の時間の上で、
石たちのつぶやきが
宏大な無言の宇宙に揮発していた。

ぼくの存在の中に迷い込んでしまった
無限と刹那。

無から放射された青い光が
小さな水溜まりに
照り映えている。

神々の山

涯でない沈黙の向こうの
湖に浮かぶ朝もやの向こうの
青い空に聳える
神々の山。

白い雪の上で、
永遠の沈黙の上で、
神々の赤い輝きが
朗々たる笑いを発している。

下界では老人が船を漕ぎ、
ゆっくりと釣り糸を垂れている。
小鳥たちが木陰で、
新しいさえずりを始めている。

シヴァは踊りを止め、
剣を置いて、瞑想しているのだろう。
朗々たるトキの断片が
羅刹たちの遊星を歩きすぎた。

カイラーサの宮殿にシヴァを訪ねる

ぼくの心の中で世界が色褪せてしまった日、
ぼくはひとりでカイラーサの頂きに登った。
シヴァの宮殿を訪ねると、
だだっ広い広間でシヴァがひとりで踊っていた。
世界の破壊の踊りだった。

踊りが終わるとぼくはシヴァを拝した。
シヴァは鋭い眼光でぼくを見下ろし、
「ここはおまえの来るところではない。」
と言った。
ぼくの心は恐ろしいまでに震えた。
勇気を振り絞って
「世界は色褪せてしまいました。」
と言うと、
シヴァは大きな声を出して笑った。
「愚かな。世界など最初から色褪せている。
真の輝き、真の意味などあるわけもない。
だから、私は世界の破壊を踊るのだ。」
ぼくは返す言葉もなかつた。
シヴァは黙って私を見下ろしていたが、
やがて一本の笛を取り出して言った。
「これはタンカーラという笛だ。
これを吹けば心に清新の光が差し込むだろう。

だが、それは幻影に過ぎないことを忘れるな。
世界は色褪せたままだからだ。」
そう言うと、シヴァはタンカーラを残して立ち去った。

ぼくは笛を手にしてそれを吹いた。
心に清新の音が響いた。
だが、それは幻影なのだ。
ぼくは笛を持って宮殿を後にした。
それ以外に道はなかった。

神々の大地に

この茫洋たる神々の大地に赤い月がぼっかりと浮かび、
沈黙の時がぼくの上を無造作に通り過ぎた。
岩に刻み込まれた時の半鐘が
遊星の上の誰でもない者たちの上に鳴り響き、
孤独な石たちのつぶやきが
風の鳴りやんだ冷たい大気の中に反響した。

その大地で、
神々は神器をかざして戦いの踊りを踊り、
荒れ騒ぐ虫たちのざわめきをよそに、
時間の断面を次々と切り裂いている。
創造の中に真理を見出そうとする神は
この時間の中の錯乱をきっと嘉するに違いない。
そして、宇宙の淵から復活した破壊の神は
己の踊りを喜悦に満ちて踊るだろう。

けれど、原野では、
叫び出さずにはいられない孤高者たちの声が
今なお石たちの上を疾駆している。
そして、時間の中に囚われた求道者たちは、
神によって描かれた創造を拒絶し、
積み上げられた祭壇を打ち壊し、
大地の上に石たちのつぶやきを刻印するだろう。

そうだ、この大地では、
未知なるもの求める声が途絶えたことはついぞなく、
だからぼくは風の鳴り止まない茫洋たる大地の上で
求道者たちと共に問いかける。
そして、不思議な声に呼び起こされた者たち、
未知なるものに向かって投げ出された者たちは、
時間の破片をただ黙って拾い集め、
存在することを嫌惡する何ものでもない者たちは、
奇怪な図形によって世界に反旗を翻し、
音の破片によって世界を切り裂こうとするだろう。

この巨大な宇宙がたった一つの真音に震撼し、
閉じ込められていた闇の声が解き放たれる日がきっと来る。
その日、存在の価値を問う荒々しい彷徨が
宇宙の涯てから響き渡り、
地球を巡る空間のはざまで、
創造の是非を賭けた新たな戦いが沸き起るだろう。
風を切って野を駆ける孤独な者たちが
絶壁の上に浮かぶ三日月に真摯な祈りを捧げ、
冷酷な神のつぶやきが刻印された大地の上で、
ぼくたちは新たな祭儀を執り行うだろう。

この大地にむせび泣く巨大な情念が、
遊星の上でただ生起しただけというおびただしい者たちの

幾重にも折り重なった時間のひとつひとつから滲み出す情念が
ぼくたちの上にただただ重々しくのしかかっているのだ。

広大な夜空から荒野に星々が降り注ぐ日、
張りつめた大気を切り裂く神々の叫びを聞き、
何ものでもない者たちと共にぼくは大地で踊り狂い、
吹き抜ける風を浴び続けた。
巨大な狂気が今なお覆いかぶさっているこの遊星の上で、
けれど、
荒れ騒ぐ大地の上に放置されている小さな石たちのつぶやきを
ぼくは導師たちと共にただ拾い集める。
むき出しの魂が漂泊するこの荒野に、
真音が滴り落ちていた。

チベットの風に

チベットの風にヤルツアンポ川の青い流れが滔々と輝き、
雪をいただく山々が遠く連なっていた。
荒れた大地にはタルチョがはためき、
オボが道の両側に次々に続いた。

村の小さな寺院では、
五体投地で老人が祈りを捧げ、
若い僧がひとりで読経の声を上げている。
村人たちのまなざしはあくまでも柔らかく、
子供たちはにこやかに近くまで寄ってくる。

けれど、その大地の上で、
憤怒神は世界を突き破る踊りを踊り狂い、
弥勒菩薩は五十六億七千万年先の世界に
まなざしを投げている。
真理がすべての極に向かって突き当たる曼陀羅の世界、
その異質の世界で、
ラマ僧の勤行の声が寺院の中にこだまし、
千界の神々が交合を遂げる。

けれど、外に出ると、
再び、八角街の喧騒がぼくたちを迎えた。
マニ車を手に道を行く老人たち、

五体投地を繰り返す信者たち。
そして、澄んだ高地の光の下に土の家が点々と続き、
ヤクたちがのんびりと時間を食んでいる。

すべてを融解する超脱した世界と
おだやかで朴訥とした光景。
でも、ぼくが投げ入れた小さな石は
この広大な大地の上で置き去りにされ、
老いた尊師の聖なる言葉は
古びた寺院の祭壇で干乾びているのだ。

カンパラ峠に登ると、タルチョが飄々とたなびき、
青いケシがひっそりと咲いていた。
ヤムドウク湖の青い水は朗々と光をはね返していた。

この異界に投げかけられる未知なるものへのまなざしは
いったいどこに凝集するのだろう。
でも、ひび割れた世界で、ここではなお、
澄んだ光が降り注いでいるのかもしれなかつた。

曼陀羅の世界へ

茫漠たる無人の野に香を炊き、
光に包まれた神聖な岩に向かって祈りを捧げ、
それからぼくは
唯一者のいなくなつた寺院の扉を叩いた。

朽ち果てた祈りが時間の上に、
そして砂の上に散逸し、
青ざめた神が
土くれだつた祭壇の上で干からびていた。

その夜、ぼくは広野のただ中で
ひゅうひゅうという風を浴び、
満天の星空の底に広がる喪の領域に導かれて、
ひとり曼陀羅の世界に降り立つた。

突然、猛々しい神々の世界からの風が吹き込み、
結晶化していない宇宙の鼓動が
錯綜した光とともに天界から降り注いだ。
陶酔した鬼神たちの踊りが
荒々しくぼくの夢を踏みしだき、
菩薩たちの勤行の列が無表情に通り過ぎた。

傷つけられた無垢なるものたちに思いを馳せ、

息絶えた夢の数々を曼陀羅の中に描き込むぼくの試み。
神と羅刹たちが踊り狂う宇宙の中心で
永劫の業火を喜悦に満ちた心で眺めるあなたの試み。
そして決して描かれることのなかった者たちに呼びかける
何ものでもないものたちの無数の試み。
神の領域を越えて、
オームの声のこだまする殺伐とした広野の祭壇を越えて、
ぼくの上に刻み込まれるひとつの言葉。

縹渺たる丘の上では風が吹きすさんでいる。
夜空の上ではかすかな光が宇宙の輪環を貫いている。
曼陀羅の世界の底で、
切り刻まれた今日という時間の上で。

砂曼陀羅を描く

薄明りの下で砂曼陀羅を描いた。

音のない寺院の中、

ただ黙りこくって、

ひたすらに何時間も砂を落とした。

床の上ではさまざまな色彩が咆哮し、

神々の意思が荒れた時間を踏みしだく。

創造された世界の軋みが憤怒となって立ち現われ、

静謐の音は世界の中から搔き消えた。

でも、それは砂曼陀羅の世界だけではない。

外の世界も常にどよめき続け、

とどまることのない阿鼻叫喚が

大地から消し去られたことなど一度もないのだ。

心を鎮めることを知らぬ者たちが

この大地の上に殺伐とした騒ぎを巻き起こし、

人々の饒舌が

世の空気を騒然とさせている。

その世界の混沌を心に響かせながら、

ぼくは砂曼陀羅を描き続ける。

すると一滴の青い砂が

川のように広がって静謐の音をもたらし、

瞑想的な色彩の重なりが

道を啓こうとする求道者たちの心に反照した。

ひたすらに描き続け、

いつのまにか巨大な青が

世界を取り巻いているのをぼくは見た。

その青は世界の混沌の源かもしれなかつたが、

そこからはたしかに光が発していた。

混沌を鎮めたわけではない。

世界の亀裂にぼくが夢の温かみをもたらしたのでもない。

ぼくは大きく息を吐くと、

砂曼陀羅を足で払い、

すべての色を床の上で混ぜ合わせ、

顔を歪めて寺院の外に歩み出た。

緑の野の向こうに雪の山々が広がり、

タルチョのはためきが心に適った。

すべては砂曼陀羅のように、

一瞬のきらめきしかもっていない。

そして、ぼくはそんな遊星の上で、

ただ、あてどもない試みを繰り返しているだけなのだ。

でも明日もぼくは砂曼陀羅を描くだろう。

ぼくは迎えに来てくれていた

きたないなりの幼い少女と一緒に

夕暮れの道を歩いた。

この子にお菓子を買ってやろう。

向殿充浩 第7詩集『架空世界の底で』

そう思うと微かに心が微笑んだ。

花粉の舞う空の下で

チベットの呪術的な韻律に乗って
求道者たちが曼陀羅の上で踊り狂う世界。
その世界の底で、
ぼくはふと耳を澄まし、
時間の流れの中で一瞬凝固した
このひとときを見つめた。

秋の日の澄んだ光が
野や川に青く溢れ、
愛と憎悪に満ちた世界から隔離された
穏やかな領域がそこにあった。
欲望にさいなまれ、熱に浮かされた
虫たちの喧騒で息苦しい世界から離れ、
ようやくぼくはここへ戻ってきた。
花粉の舞う空の下で、ぼくは大きく息をする。
けれどもう一度よく見ると、
花粉がただ降り積もり、世界は味気なかった。
空の上ではまだ何かが響いていた。

ぼくは今なお満たされていない！
真理は輝かず、行句は完結していない。
再び弔鐘を打ち鳴らす者たちの声が響き、
再び世界を切り裂く鳥たちの叫びが聞こえるだろう。

花粉の舞う空の下で、ぼくはもう一度石を刻んだ。
するとひんやりした風がそっと行き過ぎ、
世界が微かに微笑んで見えた。
その風を心に噛み込み、
チベットの野に焚祭の煙を上げた秋の一日。

突破しきれないなにか

突破しきれないなにか！

けれど真夏の野では

虫たちが騒いでいる。

ぼくの中に凝り固まっている

ちっぽけなムゲン。

HIROSHIMA

その日、無数の天使たちが
おびただしい数の天使たちが広大な宇宙から集まり、
その地に降り立った。

そして、瓦礫と化した街の中で、
うめき声に埋もれてゆく
焦げ付いた言葉の一つ一つを拾い集め、
黙って死者たちを運ぶ列に付き従った。

ある天使はただ慟哭し、
別の天使はただ天に祈った。
水を求めて死んでゆく誰でもない者たちの声、
土くれと化した無数の夢たち、
もはやたたえるものとてなく
ただ名前がかき消されるだけの光景！

夜になって天使たちは川辺に集まった。
おぞましい恐怖に天の荒涼さが覆いかぶさり、
川面は灰となった無数の魂で荒れ騒いでいた。
この遊星を悼むつぶやきが
天使たちの朗誦となり、
重い弔鐘の響きが
閉じた空間に沈み込んだ。

けれど、何も癒されはしない！

ひとりの天使が飛び立って、小高い丘の上に立ち、
一発の閃光によって廃墟となった街をひとり見下ろした。
そして天使は土の上に曼陀羅を描き、
結晶化することのない悲しみをその地に封印し、
黙ってひとり世界を出て行った。

残った天使たちは
今なお川のほとりにうずくまっている。

残光

ブルックリンからグリニッジヴィレッジへ
タイムズスクウェアからブロンクスへ
一服のヤクを求めてさまよい歩く
ぼくの時代の最良の精神たちよ、
アメリカの詩人は狂気の沸騰する時代のただ中でそう書いた。
そして、人間たちへの深い悲しみのまなざしを投げて
ガンガーのほとりの死体焼き場へと赴いた。
ホモセクシャルとヤクの衝撃的な痙攣と
吠えずにはいられない神聖な精神の爆発。
ぼくはその詩をひとり静かに
日本の古都の小さな喫茶店で読み、
いつか人間たちのいなくなった遊星の上の
雪の降り積もったエンパイアステートビルに
天使たちが降り立って
冬の日の朗々たる光を浴びるだろうと
破れたノートの切れ端に書き付けた。

深い霧が意識を厚く覆った長い道の途上で、
ほんの一瞬存在が透明になった時間だった。
無意識の闇の上にある人間の意識のような
無限の海のはてない眠りの中で、
ぼくは突然、
存在の核心に突き当たるための

何者かの一撃を感じとることができた。

そうだ、

かつてアル中の画家は

ペンキをキャンバスに放り投げた。

そして錯綜する色と線で

混沌とした宇宙の底に潜む

深く敬虔な響きを描き出した。

インドで修行した音楽家は音によるマンダラを描いた。

そして単調なフレーズの繰り返しによって

存在が時間と空間から自由になる瞬間を

無限の中へ溶出させていった。

一方、学者たちは緻密な計算を繰り返し、

存在の核心に迫ろうと試みた。

そして数億年前にうごめいていた生き物たちを

意識の中に復活させてみせた。

四十六億年の地球の歴史をひもとき、

たった一度のビックバンを描いてみせた。

小さな花粉の中の生命の輝きにも

巨大な宇宙の冷徹な法則が脈打ち、

その重々しい時の流れが

小さな蟻たちの体の中にも凝集していることを証明してみせた。

百数十億年前のたった一度のビックバン、

けれどウパニシャドの作者たちは

四十三億二千万年がブラフマーのただ一夜であり、
ブラフマーの一生は百八ブラフマ一年続くという
巨大な宇宙を知っていた。

インドラにインドラが続き、
ブラフマーにブラフマーが続く。

たとえ大地の砂粒の数、
空から降る雨粒の数を数える者がいたとしても
次々と並んでゆくインドラの数、
空間の広大な無限性をかいくぐって
それぞれのインドラ、
それぞれのブラフマー、
それぞれのシヴァをいただいて
ずらりと並んでいる宇宙の数を
いったい誰が数えることができようか、
といわれる宇宙の渦。

その宇宙の脣にヴィシュヌが座り、
永劫のまどろみの中に横たわっている。
止むことなく繰り返される創造と破壊、
その破壊を愉悦に満ちた、
けれど冷淡な表情で踊る
宇宙の破壊者たるシヴァ。

その表情には
宇宙の法則に従って淡々と己の為すことをまつとうし、
それを己の喜びとしてゆく神の心が滲み出ている。

その踊りはきれいな美術館の一室の
小さなガラスケースの中に収められていた。
ぼくは静かな美術館をゆっくりと歩き、
人間たちの狂気と沸騰する野望とが生み出した
途方もないものどもの残骸を見て回った。
そして人ごみを搔き分けてエンパイアステートビルに上り、
青空の下に広がる煌々としたビルディングの群れや
夜の美しい夜景に目を見張った。

けれどビルから見渡せる煌々たるネオンの下では
今日も生き物たちの喘ぎと呻きが続いているのだ。
カディッシュの祈りを歌った詩人も年をとった。
ペンキをキャンバスに放り投げたアル中の画家は
電柱にぶつかってあの世へ行った。
存在の苦悩を謳ったユダヤの詩人はセーヌ川に身を投げた。
カシスで石や魚たちと書いた画家は
馬肉にあたって一生を終えた。
存在を探求する者たちへの
情け容赦ない仕打ちが
依然として遊星の上を荒れ狂っている。

かつてブッダは菩提樹の下に七日間結跏趺坐し、
縁起の神秘を測り終え、
一切の個別化された存在の束縛についての
新たな理解を廻らせたものだった。

生きとし生けるものすべてを束縛する
生れついての宿命的な力を
輪廻の輪から離脱させたものだった。
けれど、
金色の鳥が舞う荒野で仏頭を刻んだ仏師たちは舞台を降り、
瞑想のブッダはパキスタンの野のただ中に立ちすくんでいる。

ぼくはアメリカの静かな公園の
小さな池のほとりで立ち止まった。
その池に住むみずすましたちは
千年前この池にいたみずすましたちの
末裔かもしれなかつた。
十万年前には
この池のほとりで
一匹のかもしかが水を飲んだかもしれなかつた。
けれど一千万年前にはこの池はなかつた。
ここは海の底だつた。
一億年前、十億年前、ここには何があつたのだろう。
そして百億年前、地球はまだなかつた。
いや、“ここ”なんてことはありえない。
いかなる場所もこの巨大な宇宙の中で
ものすごいスピードで動いているのだ。
何十億もの恒星からなる銀河系宇宙、
その銀河系を含む二十の銀河群、
その銀河群が構成する超銀河集団。

ゴーゴーと粒子と粒子の運動を続ける
冷たい宇宙。
けれど運動の火炎が絶えず飛び交い続ける熱した宇宙。
百数十億年前のたった一度のビックバン。
けれどヴィシュヌはその創造と破壊を
数えることもなく繰り返しているのだ。
微妙で地上のものでない
官能的な魅惑と
夢のように優雅な妖艶さ。
悟りの体験への内的な没頭と
穏やかな離欲の精神。

ぼくはたった一人で歩いた。
無言のビルディングの哄笑のはるか上空で
何ものでもないものたちの残光が輝いていた。

トキの向こうへ

現在という虚ろなトキを越えて、
さざ波のように響く音の障壁を越えて、
ぼくの中のとらえきれない欲望を越えて、
あなたの中の無数の気まぐれを越えて、
人の知の領域を越えて、
非言語的な空間を越えて、
ホトケたちの冷たい表情が
石たちのよそよそしい沈黙をやり過ごしている。

昼の街の喧噪を越えて、
夜の庭の木立のみずみずしさを越えて、
月の不吉な光を越えて、
星座の清妙な音楽を越えて、
碎けることを知らない法輪の響きが
遠い砂漠の風の呻きの中に、
雪山の激しいブリザードの中に、
ゆっくりと還元されている。
そうだ！
世界に打ち下ろされる神のハンマーを越えて、
天使たちのまなざしが今日も注がれているのだ。

だからぼくは
遊星の表面にしがみつき、

ひびの入った斜面にしがみつき、
空から落ちる星の滴にしがみつき、
歴史の無数の断点の中から、
創造の幻惑的なヴィジョンの中から、
あなたの意志を読みとろうとしているのだ。

でも絶対者の声は
曼陀羅の中にはないし、
荒野の巨石の中にもない！
古い賢者の文字の中にも、
占星術師の錯綜した図形の中にも、
典雅な数学記号の中にもない！
憤怒に満ちた寺院の彫像の中にも、
善を嘉する聖典の言葉の中にも、
茫洋たる海の中にも、
日の光のはるけさの中にも、
そうだ！
一切を創成した人間たちの奇怪な祝宴の中にもない！

だからぼくは見知らぬ街を黙って歩き、
とりとめのない物語をひとりひも解く。
堤防の破壊者たちの声を聞き、
道端の土偶に祈りを捧げ、
そして
世界の外からの音のシャワーに耳を澄まし、

荒野の狼たちの声の中から、
転がり落ちる石たちの中から、
祭壇に群がる生き物たちの中から、
遊星の表面に埋もれた骨壺の中から、
凄まじい速度で溢れ出してくる響きを
無音の領域に刻印しようとしているのだ。

けれどすべての音は
迷路の塹壕の中で反響するだけ！

.....

.....

.....

神が世界を形づくる以前のトキを
ぼくはひそかに待ち続けている。

ぼろを纏って旅に出よう

ぼろをまとめて旅に出よう。

磨り減ったわらじを履いて埃っぽい道を歩こう。

興奮に満ち、憎悪と喧騒が形作る世界はもういい。

夜空からは星が降り注ぎ、

寺院では壊れた仏頭が久遠の微笑を続けているだろう。

ぼくにはこの荒れた広野が似合っている。

人生の内に目を向ける者たちが織りなす息苦しさに

ぼくは決別してきたのだ。

小さな古びたあばら家を見つけて一夜の宿とし、

無意味に死んでいった石たちの声を拾い集め、

ひとりで真音を捜し求める旅を続けよう。

神々の意思はぼくには分からぬ。

この歴史の意味もぼくには分からぬ。

でも、石たちは今もなお、

荒れ騒ぐ大地の上に置き去りにされているのだ。

蒼茫の道

銅鐸の打ち鳴らされる蒼茫の道をぼくは歩いた。

打ち壊された石たちの声がぼくの心で軋んだ。

傷つけられた壁画の中に佇む都市の幻影、

ぽつかりと浮かぶ丸い月、

夢が夢を食い荒らす世界の底で、

冷たい光たちがただ交錯し続ける黒い宇宙で、

風だけが次々と碎け続けた。

でもぼくは石たちの声を拾い集め、

未知なるものたちの領域へ送り返そうとしている。

そして、転んでいるこの蒼茫の道の上で、

ただ黙々と、

時間の轟音の中に搔き消された音たちを

もう一度打ち鳴らそうとしている。

ぼくたちの夢が何ものかによって踏みしだかれるとしても、

踏みしだかれたその破片の中から聞こえてくる響きが

ぼくをこの世界の外へといざなうだろう。

一切が噛みこまれる時間の渦の淵に立って、

ぼくは幾重にも積み重なったつぶやきの重みを見つめるだろう。

天を打ち碎こうとする鬼神たちの咆哮が

ぼくの心に共鳴しているのだ。

だから、かすかに響く異界からの声に耳を澄ますがいい。
天から降り注ぐ誰でもないものたちの声に耳を傾けるがいい。
荒野でうち捨てられた寺院では
今日も石に刻まれた仏頭が
久遠の瞑想の中にたたずんでいるのだ。
求道者たちの荒野で、
でも、まだ、石たちに刻まれた夢が疼いている。

竹林にたたずみ

竹林にたたずみ、その上の空を見上げ、
鳥のさえずりに耳を澄ます。
ここのあるじは小さな庵で身をかがめて過ごし、
毎日、池の金魚を眺めている。
ぼくは毎朝あるじの庵を訪ね、正座して朝の挨拶を行う。
それから木や竹を削って音を奏で、
ぼくの人生に散らばった言葉の破片をつなぎ合わせる。
あるときはあるじから石の叩き方を教わり、
またあるときは夜の空の星々について教えを請う。
かつての恋人が訪ねてきたときは、
かすかに微笑んで来た道を帰らせ、
古い友人がやって来たときは、
少しだけ言葉を交わして別れた。

世界の喧騒はもう真っ平だ。
ドルの話も戦争の話ももういい。
たあいない狂気と酔ったような興奮に満ちた世界から
ぼくは逃げてきたのだ。
小さなつぶやきを持つ者たちがここに暮らし、
崇高なものがただの土くれと化している。
冷たい空気を静寂の中で吸い込むことが最上の幸せだ。

雨の日には静かに濡れた竹林を眺め、

池に広がる雨粒の波紋を見つめ続ける。
地上で醜く膨らんだ夢のぶつかり合いはここにはない。
荒野で沈黙していた石たちが、
ここでは微笑んでいる。

あるとき、あるじが賢者を招いて三人で対座した。
池の見える静かなあずまやに座り、
ぼくたちは石と竹と金魚についてゆっくり語り合った。
別れ際に賢者が言った。
再び会うことはないでしょう。
ぼくたちも黙ってうなずいた。
あるじは戻って金魚に餌をやり、
ぼくは石と竹を叩いた。
地上で荒れ騒いでいた者たちとは完全に別離した世界の音が
竹林に霧散した。
消えた微光が降り注いでいる。

雨粒の音に耳を傾け

ひとつひとつの雨粒の音に耳を傾け、
小さな石たちの発する微かな光とともに、
時間の外にある未知なるものたちにまなざしを投げる
ぼくの仲間たち。

石たちのざわめきがぼくたちの心をざわつかせ、
木片を打ち鳴らすものたちの音が
その小さな世界に共鳴する。

この空の向こうでは、
今日もシヴァ神が破壊の踊りを踊り、
神々が新しい世界の創造を模索しているかもしれない。

異界から舞い降りる
目には見えない不思議な形象たち、
石たちの夢を紡いでいる雨粒の静けさ。
ぼくたちの音が虚空の中に搔き消え、
微かな風が草の匂いを運んでくる。

石たちとともに過ごした雨の一日。

賢者とともに過ごした秋の一日

ぼくの夢がかすかに震え、
空の上を真っ青な風が吹きすぎていた。
大地に刻印された無数の慟哭は
膨れ上がっては大気の中に弾け、
掃き清められた寺院の庭には
意味を失った言葉たちが置き去りにされていた。

この小さな遊星の上で
ぼくたちの世界は清新の光を失い、
新たな混沌が濺んだ大地から噴き出し、
果てることなく押し寄せてきている。

でも、求道者たちの試みは
今なお、新しい音を宇宙の中に響かせようとしているし、
ぼくの仲間たちは今日もこの世界に
未知なる形を描こうとしている。

秋の日の柔らかな光の下で、
微かに震えるぼくの夢が世界に突き当たり、
けれど、不思議な鼓動が生まれてくる。
天を見上げていた小さな虫たちの息吹きが
ぼくたちの心を冷ましてくれる。

向殿充浩 第7詩集『架空世界の底で』

賢者とともに過ごした秋の一日。

時間の中の天使が

時間の中の天使が石の舟で旅をする。
伴侶となるのは小さな月と黄色い小鳥。
世界の外から降り注ぐ音の破片を頼りに
時間の中の天使が石の舟で旅をする。

行き着く先は世界の果てか、
見知らぬ土地か。
石に刻まれた小さな夢だけが
時間の中のざわめきに溶け込み続いている。

Four Walls

ジョン・ケージの夢に灯明を灯し、
彼の碎いた音たちを探し求めよう。

ぼくは山の中の古びたお堂に座り、
しとしとと降り続く雨の音に耳を傾ける。

小さなトンボがやって来て、
水辺の木の上に止まった。

空からしたたり落ちる音たちの破片。
彼の見た偶然の向こうにある世界が
ぼくの中でかすかにうごめく。
雨の山寺で。

(John Cage “Four Walls”に)

空の青

空の青、
そのはるけさの向こうで
小さな光たちに共鳴するかすかな音。
その音が
苦みの滲んだいにしえの記憶とともに
澄んだ透明な大気の中に降り注ぐ。

青い空の下では、
踏みしだかれた夢の数々を
何ものでもないものたち、誰でもないものたちが拾い集め、
孤独な求道者たちは
打ち壊された世界の幻影を
さらに小さく砕いている。

地上で生み出された幾多の混乱は
瓦礫となって広大な大地の上に積み上がり、
敵意に満ちたまなざしが
混沌の渦巻く都市の中から次々に撒き散らされ、
天を仰ぐものたちの慟哭は
ただ静かに燃え上るほかなかったからだ。

風を悼み、
荒野のただ中で燔祭をあげる

ぼくの仲間たちよ。

悲しみが染み込んだ世界の中で

ただ石を削り続ける

孤高の仏師たちよ。

さまざま欲望の氾濫する遊星の上で

誰がうつむいたものたちの声を

濁流のごとき時間の中から拾い上げるのか？

誰がひびの入ったこの世界の断点から

真なる音を響き出させるのか？

小さな生き物たちは息をひそめて天を仰ぎ、

置き忘れられた石たちは

ごうごうと風の吹き抜ける荒涼たる大地に

黙ってうずくまっているだけだ。

世界を創造した神々は

どんなまなざしでこの世界を見つめているのか？

世界を破壊する聖なる神は

どんな思いでその時を待っているのか？

、、、、、、、。

、、、、、、、。

空の青、

そのはるけさの向こうで、

けれど、透明な光が微かな夢を紡ぎ出している。

ぼくは石を打ち鳴らす世界に還るだろう。

ぼくは空の青に心を反照させるだろう。

世界にとどろく轟音が青い空に瓦解する日には、きっと。

風を切って鳴り響く音たちの向こうで

風を切って鳴り響く音たちの向こうで、
沈黙する石たちの列が語りかけるちっぽけな時間。
その時間の断点から浮かび上がる
茫洋たる思念と荒れ騒ぐ情念。
砂たちの一粒一粒がその思念と情念とを噛み込み、
土くれたちは透明な大気に向かって怒りを沸騰させている。

けれど七人の楽師はただ音を叩き、
音を紡ぎ、音を消してゆく。
ただ奔放に、音の波を、この大地に、この空間に、
そしてこのちっぽけな時間の中に解き放つ。

それがこの遊星のできごと、
この無機質の時間の中でのできごとなのだ。
乾いた風の駆け抜ける大地で新たな真音が滴り落ちる日、
音の破片がただ空の中に散逸していた。

(タージマハル旅行団に捧ぐ)